

# 阿部 勤 中心のある家(私の家)

1974年

中村好文 文・キャプション  
YOSHIFUMI NAKAMURA

「建築家はワンルームの建築によって記憶される」というのは、エーリッヒ・メンデルゾーン (1887~1953) の言葉です。

普段着の内ポケットあたりに忍ばせておき、時々取り出しては呟いてみたい含蓄のある名言ですよね。ところで、建築好きなら、そのワンルーム建築の傑作の多くが建築家の自邸であることに、とっくにお気付きのことと思います。そう、つまり、この名言は「建築家は自邸の建築によって記憶される」と言い換えることができるのです。

新連載のこの頁は、自邸という住宅作品の建築的な評論を書くのではなく、自邸を設計した建築家を訪ねて、気の張らない雑談をしつつ、自邸が生み出された背景やその魅力について、勝手な想像を巡らしてみようという趣向です。

第1回目は、阿部勤さん。

阿部さんは、子年であること、若者に呆れられるほどの駄洒落好きであること、住まいと暮らしを存分に愉しみたい人種であること、そして、常にユーモアと遊び心を人生の中心に据えていることなど、私と共通点がある上に、威張らない、押し付けない、気取らない人柄なので、こちらが勝手に親しい友人気分になっている建築家です(大先輩、ゴメンナサイ!)

その阿部さんが30数年間住み続けてきた建物は、鬱蒼とした樹木に覆われていました。外観をしみじみ眺めた後、室内に1歩踏み込んだ時、真っ先に私の頭に浮かんだのは「巢」という言葉でした。それも小動物の「巢」ではなく、大型で心優しい動物の「巢」。その印象は、阿部さんの声優ばりの艶のある低い声と、眼光鋭い面構えからの連想かもしれません(阿部さんの顔はあのパブロ・ピカソにそっくりに見える瞬間があります)。多分私だけでなく、訪れた人は誰でもそこが「男の住まい」であることを直覚するはず。現在、阿部さんが独りで暮らしているということを差し引いても、この住宅には不思議に、女性の匂いも、子供の匂いもしないのです。それでいて



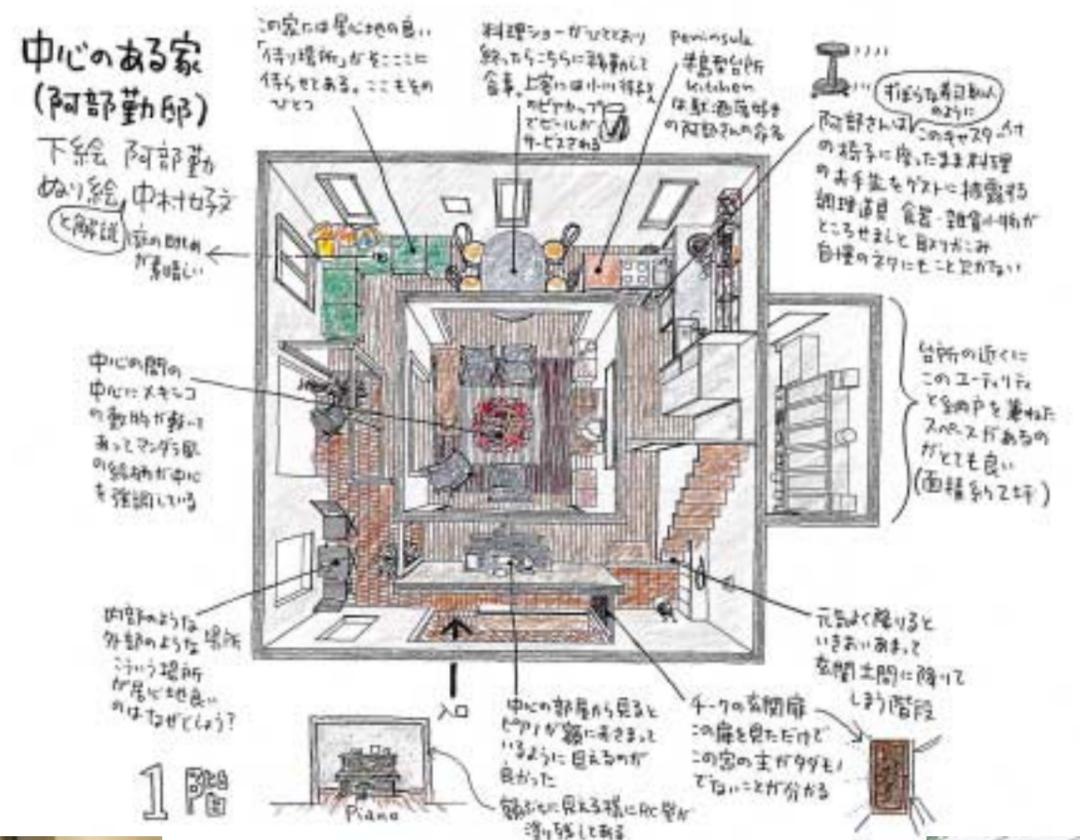
1階食堂 水平にも垂直にもつながっていく空間



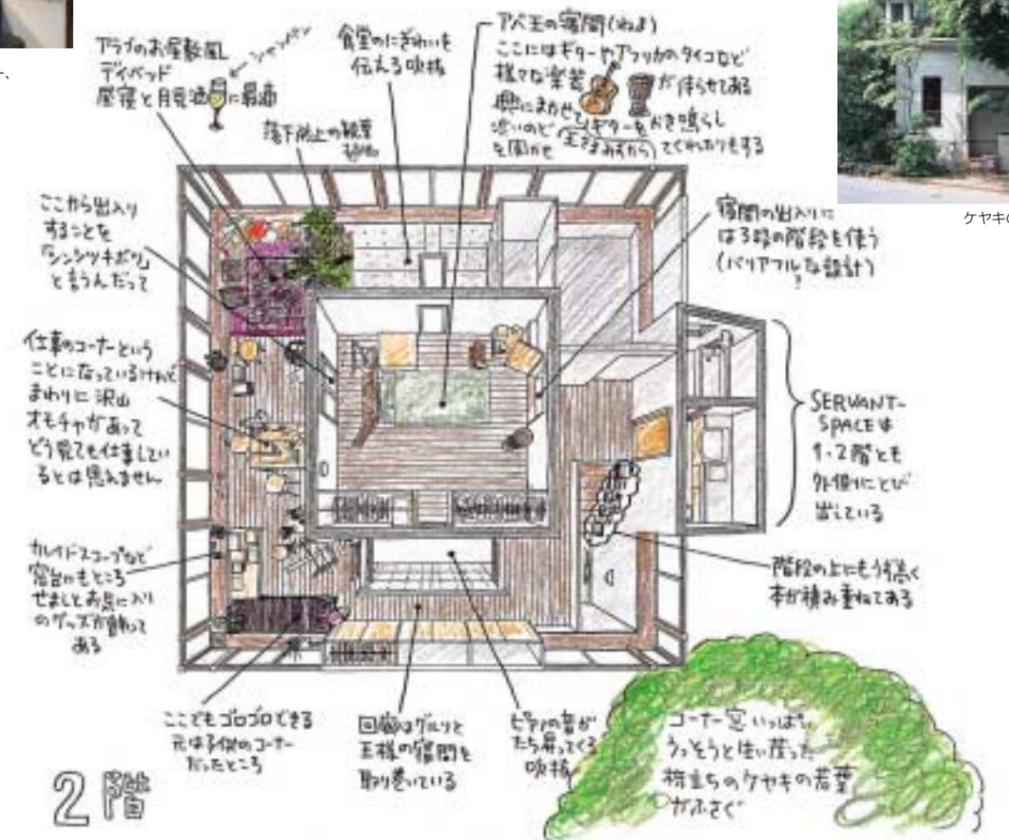
左—2階回廊 手前が仕事のコーナー、奥が大きなダイニング  
右—思わずゲストに料理の腕前を見せたくなる半島型台所



今夜のご馳走はよく煮込んだオックスティールシチュー



1階



2階



ケヤキの大きな葉陰に身を隠す建物

“男やもめの住まい”めいた、わびしい印象や、むさ苦しい印象は綺麗サッパリありません。かつてここに美しく清楚な奥さんが暮らしていて（ピアノの上に飾ってあった写真を拝見しました）、男の子がここで育ち、巣立っていったと聞いても、その様子を実感として想像することが、私にはどうしてもできませんでした。それより私は、世の中には、“男の家”というものが、という想念に取り憑かれていました。イスラム圏の国々や韓国などにある“男の家”の気配が、この阿部邸にも色濃く漂っているのを感じたのです。

そう思って改めて室内を見渡すと、いよいよその思いを強くすることになります。阿部さんは、家の中心に千夜一夜物語の王様のように陣取り、自分の愛するモノたちを周囲にぐるりと侍らせます（時には訪ねてきた妙齢の女性たちも取り巻くことでしょう）。そして、そこには、一種のハーレムのような濃厚な空気が醸し出されます。取り巻くものたちの筆頭は、さまざま空間です。明るい空間、薄暗い空間、狭い空間、高い空間、広がっていく空間、閉じた空間、行き止まりの空間、コンクリートの空間、木で包まれる空間……。そしてその空間に雑貨、小物、玩具、家具、什器、絵画、骨董、各種の楽器、書物、観葉植物などが、慎重に選ばれ無造作に置かれています。それらは室内だけではなく、家の外にも波紋のように広がっていき、最終的には庭の樹木となってすっぽりと王様の阿部さんを取り囲むことになるのです。波紋の広がり、壁の開口部が微妙にずれたり、ピタリと重なったりするように注意深く配置されていることで、書き割りの壁を幾重にも並べたような、一種のだまし絵的な空間効果をもたらします。

この家は入れ子状の構成を持つ、非常に中心性の強いプランですが、特筆しておきたいのは、居心地の良い特等席が、中心の部屋だけではなく周辺を取り巻く回廊状の空間のあちらこちらに、実に巧みにちりばめてあることです。1階には、座りながら（つまり、お酒を飲みながらということになります）調理のできる阿部さんご自慢の半島型台所<sup>ペニシュラキッチン</sup>があり、L型ソファの親密なコーナーがあり、半戸外のベランダがありますし、2階にはお気に入りのグッズたちに取り囲まれた仕事のコーナーや、ついゴロゴロ転がって読書したり、昼寝したくなるアラブ風のデイベッドがつくり付けられた魅力的な居場所もあります。そして、そのどの場所においても、樹木の繁茂した惚れ惚れするぐ

らい野趣に富んだ庭の景色が眺められるのが、この家ならではの馳走になっています。

さて、ここで先ほどの駄洒落の話。

先日取材では、さっそくその強烈な駄洒落パンチを浴びました。阿部さんは丁寧に建物の内外を案内してくれましたが、どうやら、要所要所にバスガイド嬢の口上よろしく、とっておきの駄洒落が用意してあるらしく、油断しているとその駄洒落パンチがカウンター気味に炸裂するのです。例えば、2階では、回廊にぐるりと取り囲まれた主寝室の説明をした後、床面から75cm上がっている開口部を指さして「ここからも出入りするんですよ」とこともなげに阿部さんは言い、驚いた私が思わず「こんな高いところから？」と問い返すと、すかさず「うん、寝室鬼没（神出鬼没）と言うでしょ」と言ってみたり（まったく!）、1階のユーティリティ兼納戸では「ちょうど良い広さですね」と感想を述べると、澄ました顔で「えーと、ここは、約…2坪ってところかな、余剰（4畳）スペースだから…」と応えたりする具合です（やれやれ!）。

こう書くと、阿部さんを“ただのオヤジ”だと誤解する人がいるといけなないので、急いで付け加えますが、阿部さんのこうした他愛ない言葉遊びは、実は、建築家という人種が、自身の手がけた仕事を、大上段に、また、さも手柄でもあるように語りすぎることの“照れ”あるいは“自戒の念”から来ていると思います。それは一種の韜晦<sup>とうかい</sup>であり、成熟した人間のバランス感覚なのです。

多分、この家と同じように、阿部さんの精神構造も、生真面目な部分と冗談好きの部分が幾重にも“入れ子状”になっているに違いありません。そのことに気付いた私は、真実とも冗談ともつかない阿部さんならではの会話の妙と建築家のおもちゃ箱のようなこの住宅を、心から愉しむことができました。\*

なかむら・よしふみ——建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学卒業。1972～74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976～80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社 2000）、『意中の建築上・下』（新潮社 2005）などの著作がある。



左—寝間越しに回廊と庭を見通す  
右—庭側から建物を見上げる。ここはバリー?



下絵が載っている絵本：『中心のある家』阿部勤著（インデックスコミュニケーションズ 2005）